

空手道詳説（5）

第2章 沖縄史の概要

はじめに

前章まで、世界の徒手系格闘技の歴史と、空手道と特に関連が深い中国の拳法（中国には嵩山少林寺の拳法や武備誌など総合武術書に見られるように多くの拳法がある。特に固有の名を挙げて説明する以外は「中国拳法」と記す）を垣間見てきた。

第2章と第3章では、空手道発祥の地であり、古くは琉球国という独立王国であった沖縄の歴史を紐解き、この地で如何にして空手（以後は唐手、空手、空手道と趣意により使い分ける）という独自の武術が発生し発達してきたのかを述べてみたい。

かつては、「琉球の秘技空手」として本土（島嶼部に対し本州、四国、九州を指す。かつては北海道の人たちも本州を指してこの言葉を使った）人の衆目を集め、今に至ってなお『空手は君子の武』、『空手は礼に始まり、礼に終わる』、『空手に先手なし』、『空手は義の輔（たす）け』（註：参照）などと喧伝されるのは、単なる宣伝文句でないはずである。

空手道は今や世界中に広がり、男女を問わず各年代層それぞれの立場をもって競技会参加の機会があるし、他にも、取り組む目的や姿勢も多種多様である。しかし、学ぶこと自体修業の一つであるとの位置付けは、他の武道と同じ背景を共有している。

ここにおいて、空手道発祥の地における歴史を振り返る必要性は、過去の沖縄が置かれてきたのは長く悲惨な歳月の繰り返りであったことと、その苦難にも拘らず実直な地域住民性を貫徹してきた事実を見逃すことできないからである。

宮城栄昌は著書「沖縄の歴史」（昭和43年11月初版、日本放送出版協会発行）で、冒頭次の記載がある。

羽田から南西へ空路 1,500 キロ、約2時間で到着する沖縄は、太平洋戦争のときまで、多くの日本人にその位置を知られていなかった。それが身近な土地として感ぜられたのは、太平洋戦争の激戦地となり、11万の戦闘員と15万の非戦闘員を失い、あげくのはてアメリカ軍の占領下におかれてからであった。（中略）また健児隊やひめゆり隊などの名が、しだいに国民の頭の中にきざまれていった。こうして沖縄が広く知られるようになった。

それでも太平洋戦争以前の沖縄、つまり沖縄の歴史は未知の事ごとに属している。沖縄の歴史は悲劇の歴史、奴隷の歴史といわれるが、そういわれる意味を知っているのは、沖縄人を含めて、そう多くはいないのである。

この文から察しが付くように、本土から見た沖縄の人たちは、正当な認識を得られない弊習があった。これら長く虐げられた歴史を持つ沖縄人が、何故このように高邁な武道を生みだし得たのかを解明しなければ、空手道の真諦（根本義）を知ること不可能であると思う。

これから記述を進めるに当たり、先ず沖縄の地理を念頭に置いておいていただきたい。

註： このお言葉は松濤二十訓の一つで、「空手道大観」では「補」の字を使っているが、筆者の見解では「輔」が正しい。



沖縄諸島図

1 沖縄の地理的条件

日本本土の南方に隔絶されているばかりか、琉球諸島の島々はサンゴが発達してできた石灰岩から成るため、雨水の浸食による洞窟が多く見られる石灰質の土壌で、沃土が少なく陸地の生産に恵まれないばかりか、繰り返し台風の通る道でもある。

沖縄県の総面積は約 2276 km²で東京都を僅かに上回り、そのうち主要部である沖縄本島は約 1208 km²と半分近くを占める。沖縄諸島と石垣島や宮古島など先島（さきしま）諸島では風俗習慣も異なる。全体では 363 の島からなり有人島は 49 島である。

筆者が 25 年ばかり前に現地で直接聞いた話では、かつては最も田圃が豊かに実ったのは今の嘉手納基地周辺であり、それ以外なら余り良い稲作は育たなかったとのこと。訪れた頃は、市街地の家屋なら窓に金格子が付けられ台風から守られている場合が多いとしても、市街地から離れると板の囲いも少なく吹き抜け状態に近い住居も散見された。

これから主たる歴史の場として述べる沖縄本島は、南北の端から端まで 110 km ほどで、細長い形をなしている。次がその本島の地図である。



2 琉球の史書

琉球国は今の沖縄県であり、琉球国から見た本土は大和（やまと。琉球から見た日本のことだが、以後は日本を用いる）である。沖縄人はかつて自らを「ウチナンチュウ」（沖縄衆）、本土の人を「ヤマトンチュウ」（大和衆）と呼んでいた。

以後の国名等の記載だが、この琉球と沖縄、本土と日本、その場面で最も合致した意味をもって使い分けしながら進めたい。

正規な文書に「沖縄」の呼び名が最初に登場するのは明治12年（1879年）の沖縄県設置（琉球処分という）からである。後に詳しく述べるが、琉球処分は明治新政府の一方的措置であった。

次の3では、日本と琉球国と文化的活動の開始時期の比較であるが、これを見る限り後進的な歩みは明確である。

そのことが影響したのであろうか、史書の編纂は17世紀なので、はたして古代を正確に伝えているのかどうか疑問点が多い。

更に、権力側からの見解が主流をなす場合、古事記や日本書紀が朝廷側の歴史を正史として伝えたのと同じで、それは場所や国を問わず同様の傾向を見ることができる。

さて、琉球史最初の登場は「中山世鑑」（ちゅうざんせいがん）で、琉球王国初めて正史書である。第二尚氏初代王・尚円を先祖とする羽地朝秀（1617～1676）が王命により編纂し、1650年に成立した全6巻で、和文体によって書かれている。正史としての性格上、神話的な琉球開闢説話など正確な歴史とは言い難く、「中山」の文字を冠しているように中山王の末裔である王統を中心に置いて書かれている。

羽地の信条は日琉同祖論で、和暦の採用や源為朝（鎮西八郎）が琉球に逃れ、その子が琉球王家の始祖舜天になったとする「保元物語」や「平治物語」を参考にしたと思われる記述もある。

羽地朝秀は、第二尚氏（後述）王統第十代・尚質王（1629～1868。在位1648～1868年）の摂政となり、政治政策面でも優れた手腕を発揮した。

羽地朝秀が晩年補佐した第十一代王の尚貞王（1645～1709年、在位1669年～1709年。尚質王の子）は英邁な君主で、尚貞に仕えた家臣も秀でた者が多かった。蔡鐸もその中の一人で、「中山世譜」（ちゅうざんせいふ）は1697年蔡鐸が中心となって編纂がはじまり、「中山世鑑」が和文だったのに対し、「世鑑」を書き改めたところもあるが「世譜」は漢文によって著された。

後に蔡鐸の子の蔡温（1682～1762年）が加筆修正を施し、更に王府系図座によって編纂が継承され、これを蔡温本と呼び、正巻13、附巻7でからなっている。

蔡鐸本は紛失してしまっていたとされていたが、それが昭和47年（1972年）沖縄県立博物館所蔵の蔡温本に混入していることが分かり、貴重な発見となった。

蔡氏は、後に詳しく述べる「閩人三十六姓」（三十六姓帰化）という1792年に明国からの帰化した家系の一つで、蔡鐸、蔡温ともに高い政治理念をもって道徳儀礼の徹底を始め、王国の経済生活の安定を図る貢献をなした。

これら史書の成立を見る限り、最初の統一王となった第一尚氏王統の尚真王から200年近く経過した後であると共に、既に、島津藩（鹿児島）の武力侵攻により琉球国が敗

北し、その支配下に置かれるという大きな時代変化の後であったため、島津（日本）を意識に入れて書かれたと思われるところも否定できない。

3 琉球の後進性

次の表は「沖縄史を語る」（新里恵二著、1970年9月初版、楸勁草書房発行）からの引用であるが、有史以後の琉球と日本の文化の発展度を大まかに比較したもので、この書の中で新里は次のように記している。

沖縄の歴史は、日本本土の歴史に比べて、最初の出発点で、ほぼ10世紀ないし6世紀、平均して約8世紀ばかり、遅れていたことが判ります。文字や仏教の伝来も、たまたま伝わってきたというのではなく、そのころになって、やっと沖縄の社会が、文字や仏教を受け入れ得る状態になった、と考えねばなりません。

沖縄の歴史上に見られる立ち遅れは、その起因は何だったのか。長く歴史的先端を歩む中国、中国文化がいち早く伝えられた陸続きの朝鮮半島、近隣諸文化を自国化してきた日本というふうに考え合わせると、琉球ほどの国からも近い立地条件にある。それなのにこのような後進性を改めて提示されると、戸惑いを禁じ得ない。

文化的な事柄	沖 縄	日 本	筆者註・沖縄の場合の推定年
他国の史書への登場	7世紀末～8世紀初	1世紀末～2世紀初	隋書に登場する636年以降。
政治的支配者の発生	11世紀～12世紀	紀元前後～1世紀	有力按司の発生。
存在が確かな支配者	12世紀末	2世紀中葉	1187年に舜天王が即位。
文字の伝来と使用	13世紀	5世紀	1260年以降、英祖王の時代。
仏教の伝来	13世紀	6世紀中葉	1265～1274年の英祖王の時代。
鉄製農具の普及	14世紀	6世紀～7世紀	武器の方が早く11世紀。輸入は1352年以降の察度王から

国土の統一	15 世紀	4 世紀末	1477～1526 年在位、 尚真王のとき。
暦制のはじまり	15 世紀	7 世紀初	1404 年、最初の冊封 使来琉以降、その後 和暦を採用。
中央集権的国家の確立	15 世紀～16 世紀	7 世紀	1477～1526 年在位、 尚真王による。
文学書の編集	16 世紀～17 世紀初	8 世紀	1531 年「おもろさう し」が最初。
史書の編集	17 世紀～18 世紀	8 世紀～10 世紀	中山世鑑 1650 年。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和 43 年 11 月初版、日本放送出版協会発行
 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970 年 9 月初版、株勁草書房発行
 中曾根源和編「空手道大観」、1938 年 5 月初版、緑林堂書店発行
 宮城篤正著「空手の歴史」、1987 年 9 月初版、ひるぎ社発行